

うろニアソソロジー 二〇一九年版



# うろこアンソロジー 二〇一九年版

## 目次

珪化木のな、 海のもーツアルト 土手の上を 叫びたいと希み 猫	海桙今日子 有働薫 三井喬子 富澤守治	2 6 9 11
低温火傷 乗換え駅	南原充士 鵜飼千代子 清水鱗造	22 24 27

## 珪化木の的な、

海埜今日子

たとえば、ニスを塗った木の箱のような、ガラス瓶のような、つるつるとしたものの。かたさが、ひんやりと、ときに、にがくて、そんな、ちいさな入れ物を、ずっと持ち運んできたのだと、彼はおだやかな顔で、影をみつめながら、だれに、そのことをいったのか。

珪化木という化石。木の切り株みたい、年輪がつるつる、全体は二酸化珪素化している。水晶や石英の親戚、炭になりそくなった木、と（いいたくないのだが）呼ばれることも。石炭採掘の際、たいていそのすぐ近くにいる、かたい珪化木は邪魔になるそうだ。

入れ物の中身を、炭色の、夜のほとりで、ひろげてみるよ。かなしみのように、あたたかなものが、ともって、そこだけすこし、明るくなる。なつかしいような痛みが、暗さのなかで、またたいた。おおむねのかたまり。結晶化し、だんだん、判別がつかなくなる。

たいせつなものたちを、しまっておいたはずなのだが。それはもはや、持ち主から、なかば、はなれている、と行っていいだろう。しらない女が、永遠にいなくなる。しつていた男が、余白のなかで、伝言をもたらず。そのメモ書きも、中身の一部だ、つたはず。入れ物だったか、かたまりを、昼の、正午のひざしの奥で、さらしてみる。そうすることが必要だったから、彼の遺言、として、だったのだろうか。草たちのささやきが、記憶となる。たとえばそんな色が、ぬれて、影にしんそこ、傷をつぶやくので、またしまった。

二酸化珪素が、結晶化しないとガラス、結晶化し、無色透明だと、水晶と呼ばれる宝石になる。植物であり、石である、珪化木は、結晶化するとき、植物の記憶、そこに凝縮しているの、多色不透明なのだと思う。キメラ、長い年月が、きらめいている。

箱のような、ガラスのような、ちいさなかたまりは、しずんでいるの。水面に、雲や木々が映るとき、反映が、橋げたでゆらめくのに出会ったとき、空の高さのなか、ヒバリの、

あのガラス質の声、目撃したとき、それは、持っていたよ、手元に感じられるのだと、  
だれが、そのことをいったのか。多色不透明な、彼であり、あなたであり、つるつる、  
思いたちが、にがい、きしみ、とりこむこともあった。けれども、おおむね、木で、ガ  
ラスで、ひんやりと、あたたかい。わたしが持っている珪化木は、幹部分がざらざらし  
ている。

(初出『詩素』6号)

## 海のモーツァルト

有働薫

20世紀のフランスの作曲家ジャック・イベールは海軍士官だった。なるほどローマ賞を受賞した曲のタイトルは『寄港地』だし、1956年の『モーツァルトへのオマージュ』も短いが、たいへん威勢の良い曲である。この曲の中間部のフルートソロがモーツァルトの何という曲の引用かを考えたが思い当たらず、しばらく悩んでいた。そこへ「チャイコフスキー（組曲『モーツァルトティアーナ』）、マックス・レーガー（『モーツァルトの主題による変奏曲とフーガ』）、プーランク（『牝鹿』）では、モーツァルトの曲が引用されているが、イベールのこの『オマージュ』にはモーツァルトの曲からの引用は一切ない。」という情報が手に入った。現代のモーツァルトであるキース・ジャレットの『モーツァルト』も同じ。どうりで原曲が思い当たらないわけだが、まあ何とモーツァルトなんだろう、このフルートソロは！ 7、8歳ごろのこと、子供の歌の本で『モーツァルトの子守歌』（堀内敬三訳詞）を覚えて、ほかの歌とはなんだか違うと思った。（現在は

モーツアルトの曲ではないことが判明しているが、子供の私は言われるままにすっかりモーツアルトだと思い込んでいた。）

それほどこの2つの曲のモーツアルトは完ぺきだった。

ということは、私にもモーツアルトが作れるかもしれないということではないか！  
モーツアルトを創る！ 是非そうしよう！ 私にできるのは詩しかないから、詩でモーツアルトを創ろう！

モーツアルトは軍人ではなかったが、軍隊好きだったことはピアノソナタk330の第3楽章「トルコ行進曲」でも判る。「僕はドイツの男です」と手紙にも書いているぐらだから、国家（ハプスブルク宮廷）からの要請があれば、喜んで行進曲をいくらでも作つただろうのに、国はモーツアルトに注文をだすことはなかった。とにかく生活を保障するしつかりしたパトロンが欲しかったのだから、親方日の丸で、オーストリア軍戦勝式典曲などと威勢の良い曲をたちまち創り上げただろう。ひ弱く小柄だから武闘は無理だが、戦闘鼓舞には大いに貢献したに違いない。子供っぽいことではあるが、そうい

う時代だったということだ。

さて、どうやって「モーツァルト・オマージュ」の詩を創るか？

子供の頃『モーツァルトの子守歌』からもらった、生きることのみずみずしき、しみじみとした安らぎ、柔らかな幸福感を、今の時代に蘇らせることは果たして可能だろうか？



# 土手の上を

三井喬子

土手の上を

言葉を失くしたお婆さんが歩いている

良いお天気

水は冷たいだろうねえ

いや そんなことは言わない

ただ視線が上下したただけだ

若い女が歩いてくる

小さな女の子を抱いて

桃の花みたいだねえ

いやそんなことだって言わない

ただ瞳が閉じたり空いたりしたただけだ

言葉をなくしたお婆さんは

ここに

だって とても気持ちの良い朝だから

どんだん歩いているだけだ

土手の上を

土手が尽きても波の上を

波の上にも風が吹いている

# 叫びたいと希み

富澤守治

むしろ叫びたいと希み

果たせぬ夢を希み続ける

ただ、いまは。いまはせめてとも思い

夢の代わりに、歌だけでも謳うしかなくて、ただそれだけ

自然にこころは放蕩

きままに音を奏ではじめてしまう

かりそめ、それほどまでに、そうあたかも心は恋する若者のごと

そんなにも、ずいぶんと長いあいだ、途方もなく

黙り続けていたのだ 歌声は少しは大きくなったか？

ただもう黙ってはいけないのだろう  
これもそれも、新たに始める

長い、本当に長い夜

その夜の沈黙がやがては明ける

夜更けに乗ったバスの最終便が行った

その通りすぎる風に、わたしはふと思いはじめ

これに乗り、どこか遠くへとまだ見ぬ幸せな世界に、土地に行けるのだと

わたしのいまのありさまと夢

その差はこの夢を笑うか笑わぬかだけなのだ

こころはなごみ、名残り

思いは深まり、果たせぬ夢

全天のもっとも明るい星はかがやき 歌声のごと

どこか地平の彼方から聞こえてくる、遠く呼ぶもの

今夜の最終便は出て行ってしまった

聞こえ始める、天性にある希み行くこと

この大宇宙のなかで

—

いくつかの区切り、いくつかの地平

遠のいていく記憶、それさえも許せず

自らは全知全能であれ

それがどれほど不当な要求であれ

謎めいてはいない

いくつもの裏切り

時間が経てば、いずれはわかってしまう

あのとぎ気づいているべきだっただろうか？

しかし気づいたとしても、いったいなにができただろう

わたしに起こったこと、それはだれにでも起こったことか  
あるいは起こりうるのか

いまさら復讐でもない、償わせることもできない

しかし正義は常にわれにある

たまり続ける精液

女性であれば月満ちた卵子か

もったいなくも捨てていく時間

機会としての時間

時間は常に深淵

出会う機会であり、そうする余暇があり、時の様相は「ときめく」すべての時間に共通していること。「時」は「貴重だ。」

「少子化」が叫び続けられている

いったいそうしたのはだれなのか！

答えよ！狂気を宿したひとたち

若者たちは貧困化している？

中年も高年も、「格差」のなかにいる

ただ一部のなんとか闇雲に人生を送ってきたひとたちさえ残せば、揃えておけば建前だけ、企業も組織も残っていくことができる

それで？

国とかこの社会は生き残れるのか？、とんでもないことだ

わたしはそれでも夢を見ている

いつか天国のような国が来るのだ

「平和、heirwa」で「令和、reiwa」な国、子音の違いひとつしかないふたつの言葉

このことを、まだだれも気づいていないのかもしれない

これらに結びつく仕組みとなにをなすべきなのかもを

わたしはそれでも夢を見ている

いくつもの複雑な細部もくつきりと見て

すべからず最終バスの通り過ぎた夜更けの

天空の大空と大宇宙に思いを馳せる

少なくともこれは狂気ではない

こころは慈愛に満ち溢れている

それゆえに絶望などはしていない

—



きっとわれわれは、あるいはわたしもある歴史の時代に生きているのだ  
あとから見れば、とてつもない暗黒時代、稚拙な時代、まどう「とき」  
しかしこの歴史も事実としてひとは受け入れざるを得ない

胃潰瘍でひとが死ぬことが稀な時代、癌でさえも薬で抑え込み得る時代  
これが江戸時代ならどうなった。ひとはその時代を生きなければならぬ  
身分が人々を分かつ時代、家の制度が個人の幸福を踏みにじる時代  
があった？いやいやあるいはいまもそれはあるのかもしれないけど

むかし単純に地球の気圧は有限の高さしかないかと7歳の子供は聞いたそうだ  
そのフタのある世界で「あの工場の煙はどうなるんですか？」と聞いたとき  
大人たちは戦慄した。「この子供は公害訴訟に興味がある。親はどの政党だ？」  
話は政治的イデオロギーと社会中に浸透していた党派争いに転換していった  
馬鹿げている。どこまでも馬鹿げていた。でもいまもそんな大人はいるだろう

なにもかもがイデオロギーになる、本来の主旨と切実な要求は忘れられる

戦いの道具、糸巻きグルマになんの関係もない誰も彼もが巻き取られていく  
それで無知なる人間は、そのことしか考えられなくなる

2階の校舎で雨上がり、窓の外、授業中ゆるくたるんだ電線を通れる雨の雫がとても  
キラキラとしてきれいで、見とれていた子供は

「授業を聞かないで、ボーと注意を散漫にしている。」と言われた

だれが言ったか？文句があるのか？オイッ！、不愉快な話だ

そして半世紀以上も経ったいまもその子供はそのときの感受性も忘れず

こんな詩を書いている

だれがああ「しづく」の美しさを忘れるものか！

詩人たちよ、ゆく雲に差す光のまばゆさにも常に敬意を払い、戦うことを誓え！

ひとに科学で分析可能な傾向は存在する。しかし理性はそれさえも取り込み、考え、  
管制していく。多様な諸条件に制約され、専門家たちのいうのと似た行動は確かに、  
よく在る。わかったようなことを言うひとたちの言う「予言」は「せつとくりよく」  
がある「いちぶぶん」なのだ

社会と全体を見る総合力、良心的で理性的な判断と行動を見えなくしてしまう

こんなことはいくらでもある。もうやめておこう。疲れる。

例えば。就職で「容姿淡麗」という言葉は「復活していない？」と聞くと、大半の女性が「復活？消えてないよ！」と返事が返ってくる

日々、聞くに耐えないもう解決したはずのどこか似たような話が報道されている

この世界中で誉められ、「尊敬されている」この国は一体なにを解決できたのだろうか  
解決はできたにしても、なんとも時間がかかることだ。もう、本当に疲れる

偏見に満ちた暗黒時代、稚拙な時代、無責任な発言をするひとたち

ひとをさいなみ、誹謗・中傷し、貶める偏見たち、そして無知と恥知らず

それらはいまも続く。少しは、なにかが良くはなっても、人心の荒廃した時代  
時代と狂気が霧かモヤかのようにあふれる

それでもひとはそんな歴史のなかで生きていくほかはない

いまもいつまでも格闘と苦悩は続くということ

これだけはだれも忘れるな

夢は、見よ

嘆きに果てるな、みなびとたち

明日にもわたしの手紙が届く

ポストに昨日わたしが投げ入れた手紙は、郵便局の差仕立て場で打ち拵げられ取り揃えて消印機に入り、区分機を流れて行き先ごとに仕分けされ郵便車で送られる  
それから到着局で配達順に並べられて、ついに郵便バイクは走る

届いたら考えてくれ、わたしには連絡しなくてよい

慈愛への道に、時間は待つてはくれない、待ったほうがいいか？

最終便のバスが出てしまうまでに済ましてしまおう

全宇宙に語りだすとき

確かに詩人はわからない謎の文字で天啓を伝える

せめてわかる文字で書いてくれ！それもそうなのだが

どれほど歌い外れて、変調が多くとも

謎めいた文脈のうちに常に答えはあるもの

答えはあるもの

！

# 猫

南原充士

むりやり袋に押し込めた猫は  
たちまち袋を食い破って逃げる  
その影は長い

鈴が鳴る わたしの心をくすぐり  
秋は枯れ  
黒い土もおもては乾いた

夕ぐれ  
小学校の校庭はうす茶けて  
だれもない

わたしは閉め切る  
ひとりを決めこんだ部屋を  
外はもう暗い

## 低温火傷

鵜飼千代子

デイスービスをやめて  
寒くなってきて身体が硬くなってキツイから  
寝る時に貼らない簡易カイロを左肩に敷いて寝た。

低温火傷していたなんて気づかなかった  
次の日の夜背中が痒くて孫の手で搔いたらヒリヒリするから  
家族に見てもらったら  
火傷していて皮剥けて汁出ているって

土曜日の夜だし家にあった火傷の軟膏で対応して月曜日の今朝病院に行った



ホームドクターで、脳出血起こすまでパートしていたクリニックだけど

「火傷は深夜でも急患で病院に行け 低温火傷は深くまでいつているから、カイロの直付けはいけない」

って、センセは言うけど

「変な外科に行くよりセンセに診てもらった方が火傷きれいに治ること経験しているから、月曜日の朝イチで来ました」と治療してもらったけれど、センセも「それはそうだ」と

センセからみて可愛いわたし、かわいげに慣れているけれど、センセがいなくなっちゃったら次に火傷した時どうしたらいいの？と不安。

だってインスタントラーメンを作った鍋からの熱湯をかぶって足に大火傷ズルムケ治療、この度はホツカイロで水膨れな火傷って、頭硬いロ・コなら、いい加減にしてだよ  
ね

そろそろ老年仕事仕舞になりそうで頼りっぱなしのわたしは今後の人生に脅威すらかん  
じるのだわ

センセ、わたしを不安にさせないで

頼りにしています

## 乗換え駅

清水鱗造

破れ傘がばさばさと空中に踊り、ナンバリング機械の数字のランダムな移動に注射器が粉々に散り、サイの群れの移動の地響きが地平線に向かうときの細かく揺れる左右の木々が、細い多数の骨に形作られる。

これが魚の骨の始まりだ。小骨の束が開いたり閉じたりしながら行列し始めるのが、黄色い砂漠だ。そこに角のある昆虫の群れも加わる。小さい旗が混ざった行進の、ほとぼりしはもう止められないと思うと同時に、歯車があふれだす。歯車の集合の筋が砂漠の表面に魚の肋骨となって強い風に逆らう。そして、魚の骨が乗換え駅のプラットフォームからたくさん飛び立つ。